

の地の先達の足跡を辿ってみても、医学の変遷の過程がうなずける。

温故知新の心をもって医の道を究めんとする時、本書からは多岐にわたる教訓を感得することができる。

(岸本 頼子)

〔森納・千六八〇—一鳥取県岩見郡国府町糸谷一〇八五七—二二一六五三九、平成三年・B六判・二一四頁・領価一千元〕

日本医学会医学用語管理委員会編

『日本医学会・医学用語辞典・英和』

本書は一九七五年に発行された日本医学会医学用語委員会編『医学用語辞典』(以下では旧版と呼ぶ)を継ぐものである。旧版を利用して裨益を受けたもの一人として、比較しながら本版を紹介して見たい。

まず、この二冊は同様の体裁を持っているが、旧版がドイツ語の見出しを英語と対等を持っていたのに対して、本版はもっぱら英語見出しだけを掲げている点が最も異なっている。ただし、一部の主要見出しには、訳語のほかにドイツ語やラテン語が付記されている。主見出し語の数は凡例によれば約六万四千語である。単純なページ数では旧版よりも約三四〇ページ増加した。見出しの欧活字は一まわり大きいボール体が使われて、見やすくなっている。

また、見出し語の配列のし方も旧版とは違っていて、たとえば

acute abdomen (急性腹症) は、旧版では acute のところでも abdomen のところでも引けたが、本版では acute abdomen とし
てしか出てこない。引くほうとしては両方で引けるに越したことはないが、止むをえぬことであろう。Dorland などでは abdomen でしか引けないが、これよりはましという見かたもあるかもしれない。ちなみに、本版の凡例では、複合語を一つの用語として配列するのやり方を Webster 式配列法と呼んでいる。

旧版では「infection 感染」のあとに「viral : ウイルス」のような形でおびたらしい複合語が列挙されていて、こうした省略形やダッシュがしばしばページに何十と並んでいたが、省略部分が明確でない場合も多く、不便かつ不体裁だった。この欠点は本版では一掃されている。

以上では主として形式的な比較をしてきたが、旧版の致命的な欠陥は、誤綴りが多くて、とうてい信頼できる典拠として使えないことであった。Simmonds' disease (シモンズ病) や Koplik's spot (コプリック斑) が見出しの Simmond's disease や Kopliak's spot になっているような辞書を、安心して使う気になる人など、あろうわけがない。見出し以外のところに散在している誤りは枚挙にいとまがなかった。こうした誤りは幸いなことに、本版では多くが訂正されている。

もう一つ旧版で気になったのは、凡例の後の方になるほど、「書いてよい」、「使ってよい」などという表現が増えてゆくことであった。辞書の凡例というものは当の辞書作りの上での法則を各論的に示すことで利用者の便宜を計るための存在であって、こ

こで作り手が不可や奨励不奨励などの規範性を發揮するのはまったく場違いな話である。本版ではそういう色彩が消失しないまでも、ずっと薄らいだのは大いに結構なことだと思う。

筆者は本版をまだ時間をかけて使い込んだわけではないが、この歓迎すべき版を使用する上で注意すべき点、気付いた点などについて、二、三を以下に挙げておきたい。

まずこの辞書はもっぱら米国流の綴りに従っていて、英国流の表記は無視している。また解剖学名には(物質名もだが)省略されているものもひじょうに多い。さらに略語は、ぶつう略称で呼ばれているものごとく一部 (BCG, AIDS, SMON, A-V block など) が見出し語に採用されているに過ぎない。

カタカナ語の長音表記は使用される分野の傾向にも影響されるわけだが、この辞書ではコンピュータ、スキヤナ、ドライヤ、ネブライザ、レスピレータなどは語尾に長音符がなく、インレー、アレルギー、カタレプシーなどはあり、サンブラ、モニタ、ジストロフィ、クロマトグラフィ、ファクタなどの語尾の長音符はあってもなくてもよいことになっている。語中のもではパターンは長音符あり、ポリープではどちらでもよいとなっている。

この辞書には中学一年で教わるような単語もかなり入っているが、無駄なものも多い。w の部でいうと、ただ「弱い」という訳語だけ付けた weak などはその例で、window, winter, wish, wood, wool などと同様である。これに反して、「痰を伴う」という意味のある wet などにはもっとしつかり説明も付けて載せてよいものである。また、waste には「消耗した」という形容詞だ

けが付いているが、「廃棄物」「老廃物」という名詞の意味も重要なはずである。

ちなみに、旧版になくして新版で入った語には、CNS, Cowper's gland, day blindness, hippocampus, lumbical などがある。旧版にあって本版になかったのは、stye (麦粒腫)、tunica, unstriated muscle, chiblain (しもやけ)。ただし、旧版見出しは誤綴)などで、旧版・本版ともになかったのは earlobe (耳朶)、Snel-len's chart (視力表) のようなものであった。

本版での改善事項を重視したために、おのずから旧版に対して厳しくなったが、時間的制約の中で新版を完成された草間悟委員長をはじめとする現委員会に敬意を表するとともに、コンピュータ化小委員会を設けるなどして本版の基盤を推進整備された旧委員会の功績も銘記しておきたい。

(三輪 卓爾)

〔南山堂・〒一三東京都文京区湯島四一―一〇三―五六八九―八八五〇、A 5 版・一五八七頁・一九九一年四月
・一二、三六〇円(税と別)〕

谷津三雄・森山徳長・本間邦則共訳

マルヴィン・イ・リング (Malvin E. Ring) 原著

『図説 歯科医学の歴史』(Dentistry An Illustrated History)